



Weekly Market Report

Aug 1, 2022

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

米景気鈍化懸念が強まるなか、労働市場への波及が注目される

USD/JPY (1週間の値動き)



(出所) Bloomberg

コメント

先週のドル円相場は一時132円台半ばまで大幅に円高の動きが広がった。週初はロシア産ガスの欧州向け供給削減によりエネルギー価格が上昇する中、ドル円は136円台前半からじり高の展開となった。その後、FOMCを控え様子見ムードとなり137円を挟む水準で売買が交錯した。27日に発表されたFOMCの結果は全会一致で市場予想通り75bpの引き上げ。パウエルFRB議長の「ある時点から利上げを抑制することが適切」等の発言から、ドル売りが強まりドル円は28日東京時間朝方には一時135円台前半まで円高が進行した。その後、同日NY時間に発表された米4-6月期GDP速報値は、前期比年率▲0.9%と予想外のマイナスとなり、2四半期連続でマイナス成長となった。米10年債利回りが2.6%台まで低下したことを受け、29日の東京市場では一時132円台半ばまで円高が加速した。今週は米ISM景況指数や米雇用統計が予定されており、一段と景気後退懸念を高める内容となるかが注目される。(市場営業部/木田)

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
8/1(月)	(米国) ISM製造業景況指数	52.0
8/3(水)	(中国) PMIサービス部門	54.0
8/3(水)	(米国) ISM非製造業景況指数	53.7
8/4(木)	(英国) 英中銀政策金利	1.75%
8/5(金)	(米国) 非農業部門雇用者数	+250K

USD/JPY (5年間)



(出所) Bloomberg

今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
嵯峨大輝	130.50 – 136.50	景気後退懸念の流れから急激な円安進行は一服。米経済指標が事前予想比で下回る場合、一層の円高進行に警戒。
三原大希	129.60 – 135.50	FRB当局要人の発言、経済指標の結果に注目。内容次第ではリセッション懸念が想起され、更なる円高進行となるか。

2. 円金利相場概況

景気後退懸念が拡大。今週は経済指標や米金利の動向に注目。

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）



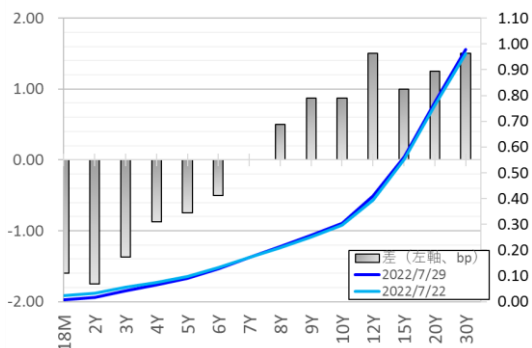
(出所) Bloomberg

コメント

先週の10年国債金利は週後半かけて低下する展開となった。週初は前週末に米国や欧州の景気後退に対する警戒感から欧米の金利が低下、国内債にも買いが波及。26日の40年債入札は強めの結果となるも方向感はず。週中は国際通貨基金（IMF）が2022年の世界経済の実質成長率見通しを下方修正したが、FOMCを控えて様子見ムードが継続。注目のFOMCでは、0.75%の利上げが決定。パウエル議長の発言から、米大幅利上げ期待が後退したことで、米10年債利回りは2.72%台まで低下。それに伴い、10年国債金利も一時0.19%台まで低下する場面も見られた。その後は0.20%を回復するも米GDPが2四半期連続でマイナス成長となったことで、週末にかけて米金利が大きく低下。円金利も0.185%まで低下して越週している。今週は米雇用統計をはじめ、重要経済指標や企業決算が集中。景気後退懸念が広がる中、経済指標の結果や米金利の動向から今後の方向感を探る展開になると予想。（市場営業部/嵯峨）

金利スワップ変化（1週間）

(%)



10年円金利スワップ推移（5年間）

(%)



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

(出所) Bloomberg

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
正村光太郎	0.16% - 0.23%	先週は昨年3月以来の0.20%割れ。今週も火曜の10年債入札と金曜の米雇用統計に注意しつつ居所を探る展開か。
伊豆浦有里恵	0.15% - 0.21%	10年国債入札やFRB高官発言には要警戒も、週末の米雇用統計を控え、積極的なポジションは取りづらい地合か。

3. 今週のトピックス

当面の豪ドル相場見通し

RBAによる金融引き締めと貿易黒字の拡大が豪ドル相場を下支え

<オーストラリアの経済状況と金融政策>

オーストラリア経済については、堅調な労働市場や輸出の拡大を受けて回復基調となっており、RBA（オーストラリア準備銀行）による実質GDP成長率見通しは2022年が+4.5%、2023年は+2.0%となっている。ただし、世界的なインフレ高進とそれに伴う中央銀行の金融引き締めによって景気の後退懸念が高まっているため、オーストラリアの成長率についても下方修正される可能性は高いといえる。

オーストラリアのインフレ状況については、サプライチェーン問題や海上運賃の上昇でガソリン価格が過去最高を記録しているほか、洪水の影響で食品価格も高騰、4-6月期のCPIは総合で前年比+6.1%、トリム平均値は+4.9%と21年ぶりの高い伸びとなっており、RBAのターゲットとするコアインフレ率（2-3%）を大きく上回って推移している。

RBAの金融政策については、2022年5月に0.25%、6月に0.50%、7月に0.50%の利上げを行い、現在の政策金利は1.35%となっているが【図表1】、インフレを抑制するため、年末に向けてさらに利上げを進めるとみられ、2022年末の政策金利は市場で3.0%程度の水準が織り込まれている。ただし、オーストラリアも欧米諸国と同じく、引き締めを強めれば景気減速、不十分ならインフレ高進、といったリスクにさらされている状況といえるだろう。

なお、RBAの量的緩和については5月に再投資を停止し、すでにバランスシートの縮小が開始されている。

<オーストラリアの貿易収支>

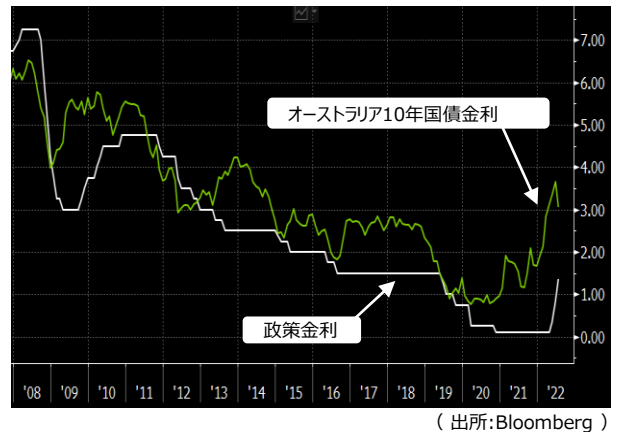
オーストラリアの貿易収支は黒字幅が拡大しており、5月の貿易黒字は160億豪ドルと過去最大を記録【図表2】。オーストラリア最大の輸出品目である鉄鉱石については中国のロックダウンに伴う需要の減退から価格は頭打ち傾向となっているが、石炭や液化天然ガス（LNG）の価格高騰による輸出の拡大が貿易黒字を大きく押し上げている。世界的なエネルギー需要の高まりを受けた良好な交易条件は今後も豪ドル相場の下支えとなってくる。

<当面の豪ドル相場見通し>

当面の豪ドル相場については底堅い展開が予想される。米国FRBの利上げ加速を受けたドル買い圧力や中国の景気減速懸念などが豪ドル相場の上値を抑制するものの、RBAによる金融引き締めや貿易黒字の拡大が豪ドル相場の買い材料となってくる。また、シカゴIMMの投機筋ポジションでは豪ドルのショートが過去最大の水準から縮小して、現在は安定した推移となっており、投機筋による仕掛的な動きはあまりみられていない状況だ【図表3】。豪ドル相場の当面のレンジについては、対ドルでは0.6700-0.7200、対円では90.00-96.00円のレンジを想定している。

（チーフ・マーケット・ストラテジスト／諸我）

【図表1】 オーストラリアの政策金利と10年国債金利



【図表2】 オーストラリア貿易収支と鉄鉱石価格



【図表3】 豪ドル相場とシカゴIMM投機筋ポジション



ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会